



病院に通う電車の中で読むために、夫の書棚から文庫本を1冊取り出して、バッグに入れました。軽くて、嵩張らないというのが条件でしたが、もう一つの理由は、2017年のノーベル賞受賞作家である日系イギリス人カズオ・イシグロの作品だったからでもあります。夫は受賞のニュースを聞くとすぐに『私を離さないで』を買っておりました。ところが読みだすと、「ついていけない」とか、ブツブツ言っていました。私はブッカー賞を受賞し、イシグロの代表作となった『日の名残り』を市立図書館に貸し出しを申し込みました。300番以上待ちという状況でした。積読者である私は、「後日…」と思い、キャンセルしました。電車に1時間以上も座っているのですから、この時間は読書と、昼寝の時間と思い定め、イシグロの『わたしを離さないで』を読むことにしました。

『わたしを離さないで』の原題は "Never Let Me Go" です。この題名を聞けば、♪ Love me tender, Love me sweet, Never let me go ♪ と耳元で囁くかのように甘く歌うエルビスの声を思い出さずにはられません。ラブ・ロマンスと思って、楽しみに読み始めました。

主人公は「介護人」として働く31歳のキャシーです。彼女は親友ルース、友人トミーや同世代の子ども達と過ごした若き日のことを回想します。彼らは学寮で幼い時から暮らしています。家族の影はなく、社会から遊離した生活は謎めいて、異様さを感じます。幼いキャシーの、友人との葛藤や、心理的屈折を乗り越えようとするデリケートな心の襲、心理、感情が克明に描かれています。けれども1ページ目に、「提供者」というキー・ワードが出てきました。子ども、提供者となれば、臓器移植のために養育されている子どもたちではないか、と思ったのです。ですから、不可解でおぞましい空間に飛び込まなければ筋書きについていけないのです。サスペンスの謎解きのような展開となります。

キャシーは才気煥発なルースに魅かれ、支配者タイプの彼女との交友関係を受容していきます。また、癩癩を起こし、仲間からドジと揶揄されるトミーに共感を覚え、彼と話すとき心と意思が通じ合います。これらの子ども達は生理的、情緒的には自由であっても、社会的、経済的には囲いの中から出ること考えられず、自分の出自も知り得ず、自分は何者で、どのように生きていかなければならないように洗脳されています。ただ従順に自分の臓器を提供するために短い命を生きるのです。

苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。(イザヤ53:7)という生贄の仔羊のイメージが湧いてきました。けれども愛しあうカップルになれば、提供が猶予されるという噂を信じるようになります。ルースは提供を終え、キャシーの介護を受け、死を迎える前に、キャシーとトミーとの愛情を知り、妬ましくなり、トミーを自分のステディ(愛しあうカップル)にしたと告白します。トミーとステディになり、提供の猶予を得るようになると言って死んで行きます。キャシーとトミーはそれを願って行動を起こしますが、学寮の責任者から、「提供者」はクローン人間、つまり人間の姿をした「動物」として飼育され、もしかしたら高度な人間性も持っているのではないかと教育もされた、ということを知られるのです。夢は砕け、トミーも提供を終えて死にます。キャシーは灰色にしか思えない空間の中で涙と共にすべてを受容しつつ、トミーが自分の心の中に生きていけると感じるところで終わります。

イシグロは少年、少女の感性の世界の背後に、あり得るかもしれないクローンによる臓器移植という人間の生への欲望を描き出しています。エルビスの歌の ♪ love me tender/ love me long/ take me to your heart/ for it's there that I belong (いつまでも優しく愛して。あなたの心へ連れて行って。そこが私がいるところなの。) ♪ が響きます。臓器は生命を保つ物体ですが、感情、心、魂という目に見えないものが生きることを実感させるとイシグロは伝えているのでしょうか。